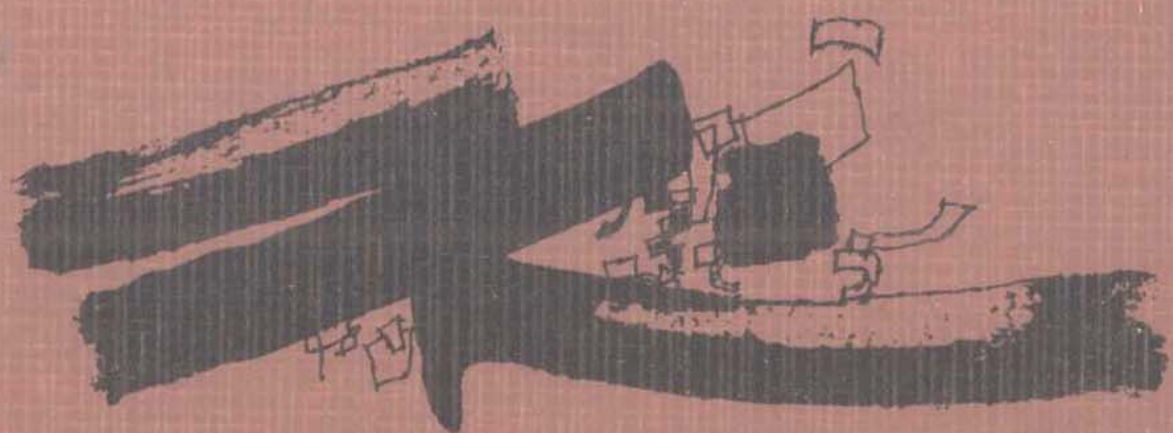


三好徹
火の影



火の影

三好 徹



青樹社刊

火の影

定価 320円

昭和44年12月10日発行

著者	三好徹
発行人	土井勇

東京都千代田区三崎町2—6—7 青樹社

電話(261)9766番・(263)7267番 振替東京47648番
落丁・乱丁本はお取り替え致します

火
の
影

目次

火の影	五
煙の殺人	六
自殺の勧め	九〇
靈感少女	一七
奇妙な遺言	一四
蜜の毒	一七〇
殺意の成立	二〇四

装幀 浜野彰親

火の影

1

週刊東西の記者森崎が、銀座のはずれに近いバー「デュパン」に通うようになったのは、友人の菱刈に連れられて行ってからであった。菱刈と森崎は、同じ年に東西新聞に入社した仲で、菱刈は社会部に属し、森崎は週刊誌の編集部にいる。安いバーを紹介するよ、と菱刈にいわれて、三月ほど前に案内されたのが最初だった。

「デュパン」は、スタンドバーで、客が七、八人も入ると一杯になる。カウンターのなかに、マダムの常代とバーテンの大沼がいるきりで、ホステスはいなかった。森崎や菱刈の安い給料でも、週に一、二回は飲みに行ける。

その日は、火曜日で、森崎は午後六時ごろデュパンに顔を出した。そんな早い時刻に行くことはめったにないが、たまたま、八時すぎに取材で人に会う約束があり、それまでの時間つぶしに行く気になったのである。

予想したように、店はすいていた。というよりも、奥のスツールに女の客が一人いるきりで、ほか

に客はいなかった。

バーテンの大沼ととりとめのない話をかわしながら、森崎は、常代と顔を寄せるようにしてなにか話あっている女客を観察した。

年は三十になるかならぬか、というところであろう。横顔しか見えないが、口紅をつけただけの化粧で、ひどく地味な印象をあたえる女性だった。

常代は、その女の客に対して、森崎たちに接するときとは違った丁寧な態度をとっていた。森崎たちには、親しみを表現するためもあるうが、なれなれしい言葉を使うのであるが、このときは、かしこまりました、というふうな言葉で応待していた。いつも見なれている常代らしくなかった。

女の客は、森崎が入ってから、十分ほどして帰った。常代は丁寧に外まで送り出し、戻ってくる、カウンターのなかに入らず、森崎の横に坐った。

「あたしに、ビール頂戴」

と常代は大沼に声をかけてから、森崎の方を向いた。

「こんな時刻にお珍しいわね」

「珍しいのは、そっちの方だと思うね」

「どうして？」

「こんな時間から流しこむなんて、旦那に逃げられたんじゃないのか」

「旦那なんていないわよ。いれば、こんな苦労はしやしないわ」

「苦労なんて、あるのかね」

森崎のひやかしぎみの言葉にすねたかのように、常代は肩をぐいっと押しつけて、

「森崎さんにはわからないでしょうね。こんな小さなお店でも、独りでやっていこうとすれば、それなりの苦労があるものなのよ」

その言葉には、なにかしら実感がこもっていた。

常代と客たちの会話は、たいてい、きわどい話題に限られていて、苦労などという言葉の出てくることは、あまりなかった。もちろん、常代にも、バーをいとなむ上での苦労のあることはわかっているが、バーへ酒を飲みにくる客は、なにも苦労話を聞くためにくるのではない。常代はむしろそれを心得ていて、そういうやりとりを決して口にすることはなかったのである。だから、この日は例外といってもよかった。客がほかに一人もいなかったためかもしれない。

「それにしても、今夜はいつもと違うようだね」

「そうかしら」

「そうさ。さっきの客に対して、バカに丁寧だったじゃないか」

常代は肩をすくめてみせた。数年前までは、ある劇団の研究生だったというだけに、そんなしぐさにも、演技とは見えない色気がある。

「ああ、いまの女の人のこと？」

「そうだよ」

「あれが苦労のタネなのよ」

「水商売をやめて堅気になれと、親類一同を代表して意見しにきたのか」

森崎は、常代を笑わすつもりでそういったのだが、彼女の方にはこりともしなかった。ビールをぐいと飲みほして、

「違うわよ、あの人は、鬼よりこわい借金取りよ」

「ふうん」

「金色夜叉のお使いさんね」

「高利貸し、か」

「古いわね。いまは、あの人がいないから構わないけれど、高利貸しなんていわないのよ。金融業よ」

「どこの人だい？」

「赤坂玉枝といつてね、見出しふうにいえば、銀座に君臨する女金融王よ。いや、金融女王かな」

「赤坂玉枝？ 聞いたことないな」

「だから、森崎さんには、わたしたちの苦勞がわからないのね。パトロンもちは別だけれど、銀座でバーをやっているところで、あの人のご厄介にならない店なんて、おそらく、数えるほどしかないんじゃないかしら」

「ほう」

うなずきながら、森崎は職業意識をかき立てられた。

銀座のバーのマダムやホステスは、それぞれに人生の歴史をもっており、それはそれでドラマチックなものがあるにちがいない。しかし、それだけでは週刊誌の記事にはならない。人生の苦勞は、だ

れにだってあるのだ。

しかし、女金融王となれば、これは別である。よく週刊誌の話題は銭と女だといわれているが、まさにそのものではないか。常代のいったことが、そのまま見出しに使えそうである。

「赤坂玉枝って、いくつくらいの女性なんだい？」

「そうね、六十五、六かな」

森崎は、ちよつと落胆した。

「なんだ。そんな婆さんか。名前からすると、色っぽい中年増かと思つたんだが……」

常代はくすくす笑つた。

「お色気なんて、これっばかりもないわよ」

「で、前身はなにをしていたんだい？」

「さあ、くわしいことは知らないわ」

金利はどれくらいか、いくらくらい借りているのか、それを訊こうとしたとき、新しい客が入ってきた。

常代は森崎の横からはなれて、カウンターのなかへ入ってしまった。かりに、新しい客がなかったとしても、そのようなかれの質問には答えてくれなかっただろう。森崎と彼女とは、それほどの仲ではない。マダムと客という関係にしかすぎず、赤坂玉枝から借金している事実を語ったのも、取り立てられた直後のいまいませが、常代の心をかき乱していたからにちがいがなかった。

森崎は、編集会議のときに、赤坂玉枝の話をもち出してみた。

編集長の草野は、

「そんな婆じゃなア」

と小首をかしげていたが、ともかく調べるだけ調べてみる、と森崎に取材を指示した。うわべは華やかにみえる銀座のバー業界の内幕が探れば、特集記事としてページをさこうというのである。

森崎は、まず電話帳で住所をつきとめてから、東八丁目にある事務所を訪れた。

三階建ての、木造の建物である。高層ビルの間にはさまった古ぼけた造りで、一階は印刷所、二階は貸事務所、そして三階が赤坂玉枝の住居と事務所となっていた。

森崎が入ってみると、事務所には見覚えのある三十女とがっしりした体格の男がいた。ロッカーで仕切った奥に、赤坂玉枝の机があるらしい。住居は、事務所に接して、ベニヤ板で区切られた隣らしかった。

森崎は名刺を出して、取次をたのんだ。

「どういうご用件でしょうか」

と女は切り口上でいった。

「それはお会いした上で」

「でも、それじゃ取次げません」

と彼女はにべもなくいった。

デュパンでうけた印象よりも、さらに冷たくひからびて感じられた。

「銀座の一流バーも、軒なみお宅のご厄介になっているそうですね。ま、そんなところから、現代の世相の一端を読者に紹介したいわけです」

彼女はいったん奥に消え、すぐに戻ってきた。説明するまでもなく、森崎の声は奥に届いたはずである。

「お会いできないそうです」

それはなかば予期していた返事だった。だが、ここで「はい、そうですか」と帰るようでは、週刊誌の記者はつとまらない。

「長くお手間はとらせませんよ」

「でも……」

「ほんの二十分くらいでいいんです」

すると、がっしりした体格の男が、椅子を蹴倒すように立ち上った。

「駄目だったら、駄目なんだよ。わからねえのか」

事務員というよりも、用心棒として傭われているらしい。威嚇的に、ゆびをポキポキ鳴らした。

「それは、おどかしかね」

「なんだとオ、おとなしくしていりや、つけ上りやがって！」

「それでもおとなしくしているとは、驚き入ったものだねえ」

「この野郎」

毒づいて、男は森崎を睨んだ。

そのとき、声がかかった。

「手を出しちゃ、いけないよ」

見ると、仕切りのロッカーのわきに、赤坂玉枝が立っていた。

「そうやって、挑発するのが、その人のテなんだから」

常代のいったように、赤坂玉枝は六十五、六の老婆だった。背の低い、髪をひつつめにした貧相な女である。女金融王という感じではなかった。着ている和服も木綿ものらしかった。だが、声には不思議な力があつた。

「ブン屋さん、商売のことはだれにも話さないことにしているのよ。だから、帰ってもらいましう」

「長くはかかりませんよ」

「時間の問題じゃないことくらい、わかっているはずよ。帰らないと、不退去罪ということになるわ」

このクソ婆め、と森崎は肚のなかで罵ってみたが、かれの手に負える相手ではないらしいことを、感じないわけにはいかなかった。

そのとき不意に、猫の声が聞こえた。

黒い大きな猫であつた。奥の方から出てくると、玉枝の足もとにまつわりついた。玉枝は腰をかが

めて猫を抱きあげようとした。猫はするりとその手を逃れて、女事務員の方へのそのそと歩み寄った。

「クロちゃん」

と玉枝は呼んだ。

気味の悪いほどに、優しい声だった。森崎は静かに身ぶるいした。

女事務員は、クロを抱きあげると、玉枝に手渡した。それをふところに抱くようにして、彼女は奥へ消えた。森崎の存在など、まるで忘れたかのようにだった。

腹立たしい限りであつたが、ひとまず引き揚げるしかなかった。

森崎は、銀座通りを、鬱積した気持を抱きながら歩いた。編集長に売りこんだ手前、門前払いをくわされたとは、いかにもいいにくい。それに、あんなクソ婆に軽くひねられたかと思うと、意地にかけても、どんな女か調べてくれようという気になる。記事になるならないは、二の次の問題となっていた。

歩き続けるうちに、森崎は、菱刈のことを想い出した。

菱刈は、記者用語でいうサツ回りで、築地署を担当している。銀座は、当然その管轄内に入るのだ。

築地署へ電話をかけると、菱刈はおりよく手すきだった。お茶でも飲もうか、といって、会う店を指定した。

森崎がその喫茶店へ行ってみると、菱刈はすでに先着していた。そして森崎の打ち明け話を聞くと、

「あの金貸し婆さんは、おれは会ったことはないが、かなり有名な存在らしいぞ。銀座のバーやキャバレーがたいてい借金しているというのも嘘じゃないだろう」

と菱刈は、ブラックコーヒーを飲みながらいった。

「おれは会ったよ」

「どうだった？」

「門前払いさ」

菱刈に対しては、虚勢をはる必要はなかった。

「そこで、きみの助けを借りたいわけだ。警察で彼女のことをわからんものかね」

「さア、質屋を兼業していれば、サツでもわかるが、あの婆さんは、金貸しオンリーだからな」

「あそこに、三十くらいのオールドミスと、やくざめいた用心棒がいるんだが、あの連中は婆さんの身よりかね？」

「いや、詳しいことは知らんが、身よりは一人もいないという話だな。前に、デュパンのマダムから聞いたんだが、猫といっしょに暮しているそうだ」

「デュパンも借りているらしいね」

「へえ、そいつは知らなかったな。きみはどうして知っているんだ」

「夕方六時ごろ行っていたら、取立てにきていたんだ？」

「そうか。それじゃ、ちと調べてみるかな」

菱刈は、常代に思召しがあるらしく、にわかに熱心になった。